

説教 『祈りを遡って源流を見る』
 聖書 ゼカリヤ書 12：10／使徒言行録 1：12～14

イエスは復活し「四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された(使徒 1:3)。そして弟子たちの前で天に上げられた(1:9)。その後「使徒たちは、〔オリーブ畑〕と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た(1:12)」。要するに「エルサレムを離れず～父の約束されたものを待ちなさい(1:4)」というイエスの指示に従ったのだ。「父の約束されたもの」とは何か。「聖霊による洗礼(1:5)」。つまり聖霊降臨のことなのだが(2:3)、その出来事が起こる状況はどうだったか、をざっと眺めてみたい。

「そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた(1:15)。「百二十人」とはどういう数なのか。十二使徒の十倍の兄弟たちで、当時の全信徒の喩であろう。そんな信徒集団の中心には、熱心な祈りがあった。「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」。祈っていたのは誰だか、確かめてみよう。

イスカリオテのユダを除く 11名の使徒がいる(1:13)。婦人たち(1:14)とは「マグダラのマリア、ヨハナ、スサンナ、その他多くの婦人(ルカ 8:2～3)」か。イエスの兄弟たちとは「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン(マルコ 6:3)」。名前の分かる者を数えると 19名いる。その他の婦人も加えると、20名以上の男女が「泊まっていた家の上の部屋に上がり(使徒 1:13)」、押し合いへし合いしながら「心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」。ここは、伝統的な集会と違って男女混成。また使徒も、素朴な漁民の他に、徴税人のマタイや熱心党(革命運動)のシモン、ギリシアの文化背景があるフィリポもいる多様さだ。

きれいに言えば多様性だが、なんという雑多性か。話や慣習は合わない、育ちや社会層の違う者たちが「心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」。人は誰も優越感と劣等感を併せ持っていて、そこから自由ではない。しかし、祈りは「狭い私」を横断し、「浅い私」の底を流れていく。祈りは、神にむかう構え。祈りは人と神を結び、神は人を結んで、祈りにおいて人と人は一つになる。こんな祈りの力が、キリストの体を形作る重力となって、「百二十人ほど」の全信徒を一つにさせている(1:15)。

「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ。彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ(ゼカリヤ 12:10)」。雑多な者たちが心を一つにして祈り、絶えず推し進めさせられるのは、ここに「憐れみと祈りの霊」が注がれているから。「祈りの霊」は、私を巻き込み、私を超えて全キリスト者の祈りとなる。神の子を十字架につけた人間が、裁かれるどころか逆に、恵みの霊を受けて神の真実に触れる。

力なさそうでいて、「心を合せた祈り」はいかなる圧迫にも屈しない。祈りは、雑多な羊を一つにまとめあげる重力、一人ひとりに起こる神の息吹。祈りは、注がれている「憐れみと祈りの霊」そのものなのだ。どんな社会、どんな世間、どんな獄につながれていようとも、狭い私に閉じ籠っていても、祈りはすべてを超え、臆する羊に神の霊を注いでキリストの群に加える。聖霊降臨の前夜、聖霊の業はすでに流れ出ている。その源流は、雑多な者たちの「心を合せた熱心な祈り(使徒 1:14)」であった。



《おまけのひとこと》

親猫と四匹の子猫 すべてが違う色と柄 一匹の猫に隠されている幾通りもの素因 野生と人智が畳み込まれた奇妙な調和 教会の雑多性は 集団というより 個々に内在する雑多と対応している